乳幼児期の母子間の身体接触の発達的変化とその関連要因：保育園児を対象として

麻　生　典　子

要約

本研究は，保育園児をもつ母親 45 人を対象にして，家庭における子どもに対する身体接触の年齢差とその関連要因を検討した。質問紙法を用いて，5 つの育児場面（遊び・泣き・寝かしつけ・食事・入浴）における母親の子どもに対する身体接触（抱っこ時間・泣きに対するタッチタイプ・しつけ方略）を回答してもらった。

分析の結果，休日と平日ともに，母親の抱っこ時間の子どもの年齢差は認められなかった。寝かしつけ場面は，他の育児場面に比べ，最も抱っこ時間が長かった。親の抱っこ時間は，平日よりも休日の方が長かった。休日の遊び場面の抱っこ時間が長いほど，子どもの自己抑制得点が高かった。平日と休日の子どもの抱っこ時間が少ないほど，子どもの注意の移行得点が高かった。泣きに対して親がなだめのタッチと愛情的タッチを多く行うほど，子どもの自己抑制得点が低かった。親が泣きに対して愛情的タッチを多く行うほど，子ビもの自己主張得点が高かった。

本研究より，母親の抱っこ時間や泣きに対するタッチは，子どもの自己制御機能の発達と関連している可能性が示唆された。

キーワード：保育園児・母親・抱っこ・泣きのなだめ・発達的変化

問題と目的

現代日本の子どもの養育を巡る問題

近年，現代日本で育つ乳幼児を取り巻く養育環境が変容している。第 1 に，母親の就業率の増加である。子どもがいる世帯の母親が仕事をする割合は，2004 年は 56.7% であったが，2024 年は 77.8% になっている。正規雇用として就業する母親が，2004 年は 16.9% であったが，2024 年は 32.4% へと約 2 倍に増加している（厚生省，2024）。第 2 に，乳幼児の保育園の利用率の増加である。全体の利用率が 2013 年は 35.0% であったが，2024 年は 59.3% に増加している。とりわけ，1・2 歳の保育所の利用率が，2023 年の 33.9% から，2024 年の 54.1% に増加している（こども家庭庁，2024）。つまり，現代日本の子どもの約半数以上は，低年齢時から母親と分離して，日中を保育所で過ごしている。このような母親との分離は，子どもが親から受ける身体接触経験を少なくする可能性がある。

身体接触の重要性

親から受ける身体接触が，乳児の生存や成長発達に不可欠であることはいうまでもない。例えば，赤ん坊にとって抱っこは，移動及び運搬，危険からの保護，授乳，休息など，あらゆる育児行為を媒介する手段である（Berecz et al., 2020）。また，抱っこは，親と子どもの双方に身体行為以上の精神的価値

を与える。ウィニコット理論（Winnicotte, 1960）によると，抱っこ（ホールディング）は，親が乳児を身体的に抱っこして，乳児の様々な身体的及び心理的ニーズを満たしながら，乳児の周りに安全な環境を確保する能力である。このような親の抱っこ（ホールディング）は，子どもの身体と精神のつながりを生み出し，自己を成熟させる普遍的な環境条件である。

親子の身体接触には，身体の一部が一時的に触れるタッチという行為もある。親子間のタッチを介する間主観的交流は，楽しさ（Ishijima & Negayama, 2017）や愛情（麻生＆岩立，2016）など，豊かな情動を共有することができる。また，重要なタッチの機能は，子どもの情動を調節するなだめ機能（Feldman et., 2010）である。子どもは自らの泣きに随伴して，親からあやし行為を受けることにより，子どもの高ぶった情動を次第に鎮静させることができる。こうした親子の相互作用は，子どもの情動の自己調節機能を促進する（Feldman et al., 2010）。親子の身体接触を介する交流は，乳児の繊細な情動に応答し，乳児の情動を安定させる唯一のコミュニケーション手段である。

Internal Working Models（IWM）

アタッチメントは，Bowlby が提唱した概念で他の対象との間に形成される情緒的な絆である（Bowlby, 1969/1982）。乳児のアタッチメント行動システムは，子どもの危急の場面（病気，疲労，空腹，痛み，恐怖など）で活性化し，それを癒してくれる母親の存在によって安心感を得ることで終息する。母親が乳児の避難場所となり，安全基地として機能する具体的な相互作用の累積により母子間に特別な情緒的な絆が形成される。こうした乳児の愛着対象に対する具体的な経験は，子どもの心に内在化されていく。そして，乳児が発達すると，乳児の心の中に自己及び他者に関する表象である Internal Working Models（IWM）が形成され，子育てを通じて子どもに世代間伝達する。（Bowlby, 1969/1982）。日本人の母子を対象にアタッチメントの世代間伝達を検討した数井ら（2000）の報告によると，自律・安定型の母親の子どもは愛着安定性が高く，相互作用や情動制御において，ポジティブな傾向が高かった。一方，未解決型の母親の子どもは安定性得点が低く，相互作用や情動制御において，混乱した傾向が認められた。

保育園児のアタッチメントパターン

保育所入所による母子分離は，子どもにどのような影響を与えるのか。否定的影響の報告は，日本の家庭児と保育園児のアタッチメントパターンを比較検討した繁多ら（1982）の研究である。家庭児は保育園児に比べ，母子分離の緊張状態からの回復と探索行動の開始が早かった。一方，保育園児は家庭児に比べ，母子分離にディストレスを示し，母親との再会後に接触維持行動が多く，泣き止みにくかった。Belsky & Rovine（1988）は，乳児の母親以外の人から世話を受けた経験と母親に対する愛着の不安定さとの関連を検討した。週 20 時間以上保育所で養育を受けた乳児は，母親への愛着が不安定であった。また，フルタイム雇用の母親の息子は，父親への愛着が不安定であるという結果を報告した。一方，保育所入所が必ずしも子どもや母子関係に悪影響を及ぼすのではないとする見方もある。近年の欧米の研究報告では，保育所入所には利益とリスクが混在すると考えられている（NICHD, 2002）。例えば，保育の質が高く，保育所経験が長いほど，子どもの社会性や認知機能，言語機能が向上する利益がある。保育所での保育時間が長いほど，保育士の申告する子どもの問題行動のレベルが高くなるリスクがある。

こうした背景には，近年の保育園のケアの質が優れており，子どもが担当保育士との間に安定したアタッチメント関係を形成していることもある。日本の保育園児のアタッチメントパターンを検討した研究では，幼児の保育者に対するアタッチメントは母親に対するアタッチメントと，その安定性において違いは認められなかった（近藤，2007）。幼児の保育者に対するアタッチメントが安定しているほど，

幼児の保育者と母親に対するアタッチメントが一致していた（近藤，2008）。一方，子どもの保育者に対するアタッチメントと親に対するアタッチメントでは質的に異なるという報告もある。保育者及び母親，父親に対する乳児のアタッチメントパターンを検討した報告（Goossen & IJzendorn, 1990）によると，乳児―母親または乳児―父親の愛着分類では差が認められなかった。しかしながら，乳児―保育者の愛着の質は，乳児―母親または乳児―父親の愛着の質とは性質の違う，独立したものであった。

子どもは，家庭でうける養育と保育所でうける養育において，異なるアタッチメント行動システムを経験している可能性がある。子どもにとって保育所で受ける養育は，決して母親の養育機能を代替することではない。保育所のケアの質をどれだけ改善したとしても，母親にしか満たすことができない子どものニーズが存在する。つまり，子どもの健全な育ちを支える本質的な環境条件は，家庭において子どもが母親から受けている養育の質であると考える。

家庭における乳児期の身体接触

乳幼児期の親子の密接な身体接触の程度は，その国のライフスタイルや文化によって違いがある。狩猟採集民族の社会では，親が子どもと身体的近接性を保ちながら子育てする。子どもの主な養育者は母親であり，母親は乳児を 1 日の半分以上の時間，抱っこまたはおんぶしている。子どもの多くは母親と一緒に寝て，泣いたらすぐに養育的な対応を受け，愛情深く接してもらう（Lozoff & Brittenham, 1979）。

欧米社会では，親子間にゆりかごや抱っこ紐を介在させた遠距離的な子育てを行いやすい。実際に，欧米社会の子どもは，狩猟採集民族の社会の子どもに比べて，親から直接的に抱っこを受ける時間が非常に少ない（Baildam et al., 2000）。例えば，生後 6 週から 52 週にかけて，母親が身体的ケアに費やした時間は，一日 207 分から 143 分に減少した。また，泣いて眠ろうとする乳児を母親が抱っこする時間は，一日 61 分から 17 分に減少した。日本の母親の場合は，乳児の基本的世話の点では欧米の母親との共通点があるが，より近接的な相互作用を行うという相違点もある（Caudill & Weinstein, 1969）。Mindell et al（2010）は，アジア圏と欧米圏の 17 の国の就寝形態を調査した。欧米社会では，就寝時の子どもの一人寝が約 57% と半数以上に認められ，子どもと親のルームシェアが約 21%，ベッドシェアが約 15% と低い割合であった。日本の場合は，就寝時の子どもの一人寝が約 3% と低く，子どもと親のルームシェアが約 88% で，ベッドシェアが約 70% で極めて高い値であった。

以上より，日本古来の母親の子育てスタイルは，子どもが起きてから寝るまで，常に子どもと身体的近接性を保っている。そして，子どもと一緒にいる時間は，母親は，子どもの泣きや甘えなどの様々な欲求に対して，一貫して，きめ細やかに対応しつづける。しかしながら，現代日本の子育て環境においては，母親の就労や子どもの保育所利用が当たり前となり，日本の古き良き伝統である，べったり育児が実現しにくくなっている。先行研究において，保育園児が，家庭において，母親からどの程度身体接触を受けているのかに関する研究報告はほとんど見られない。そこで，本研究は，保育園児をもつ母親を対象に，家庭における子どもに対する身体接触行動を検討し，母子間の身体的交流の特徴を検討する。母親の身体接触行動として，3 つの次元に注目する。第 1 に，母親と子の身体が連続的に接する，抱っこやおんぶ，添い寝である。第 2 に，子どもの泣きに対する母親のタッチである。第 3 に，子どもを叱る際の母親のしつけ方略である。これら 3 つの次元の母親の身体接触行動が，保育園児の年齢段階によって，どのような違いがあるのかを検討する。また，母親の身体接触行動を規定する要因として，子どもの自己制御機能と母親の Internal Working Models（IWM）に焦点をあて，その関連性を検討する。本研究は以下を目的とした。

1　保育園児の母子間の身体接触の発達的変化を検討する。

1-1　日常場面の母子の抱っこ時間の年齢差及び場面差を検討する。

1-2　泣き場面の母親のタッチタイプの年齢差を検討する。

1-3　叱る場面の母親のしつけ方略の年齢差を検討する。

2　母子の身体接触と子どもの自己制御及び親の内的作業モデルとの関連を検討する。

方法

調査対象者

関東某市の2つの認定保育園に在籍する幼児の母親45人（2歳児：8名，3歳児：9名，4歳児：17名，5歳児：11名）。母親の平均年齢は，38.3歳（年齢範囲31～46歳）。母親の職業は，企業常勤39人（79.6%），公務員5人（10.2%），非常勤3人（6.1%），その他2人（4.1%）。授乳方法は，母乳栄養が22人（44%），人工栄養25人（50%），混合栄養1人（2%）

手続き

某市の認定保育園に研究協力の依頼をした。承諾が得られた保育園の掲示板に研究協力の依頼文を掲示していただいた。依頼文には，研究協力は任意であること，匿名性が保たれること等を記載した。調査用紙は一人ずつ封筒に入れ，担任保育者から各家庭に配布をした。回答した調査用紙は厳封をした後，担任保育者まで提出してもらった。最終的に，126名の保護者に調査用紙を配布し，同意が得られた48家庭から返信が得られた（回収率38.1%）。本研究では，未回答項目が多いデータを除き，45名のデータを分析に採用した。

調査内容

対象者属性：母親の年齢，子どもの数，子どもの月齢及び性別，職業，授乳方法等。

日常の育児場面の抱っこ質問紙：日常の母子の抱っこ時間を検討するために，麻生（2018）を参考に，5つの育児場面（遊び・泣き・寝かしつけ・食事・入浴）を設定し，親子の身体が連続的に密着する抱っこやおんぶ，添い寝等を行う時間が，一日のうちどれくらいあるか，時間単位で回答を求めた。加えて，一日のうち子どもを抱っこしている時間の合計（以下総抱っこ時間）と抱っこしていない時間の合計（以下総非抱っこ時間）を時間単位で回答を求めた。

泣き場面のタッチ評定尺度：子どもが泣いた時の母親の身体接触パターンを検討するため，タッチ評定尺度（麻生・岩立，2016）の泣き場面に関するタッチカテゴリーを採用した。「愛情的タッチ」の6項目（さわる・なでる・荒々しく揺らす・持つ・握る・キスする），「なだめのタッチ」の8項目（抱きあげ・身体を密着させて抱く・抱き変え・静かに揺らす・抱きしめ・支え抱き・軽く叩く・さする），「侵入的タッチ」の5項目（振る・マッサージ・突っつく・くすぐる・つまむ）の計19項目を設定した。3段階（3：いつもしている，2：したりしなかったりする場合がある，1：いつもしない）で回答を求めた。

子どもの叱り方質問紙：親のしつけ方略を検討するため，麻生（2015）を参考にして，子どもを叱る時の親の行動カテゴリー30項目を設定した。その内訳は，「肯定的しつけ」を表す10項目（愛情を伝える・目を見て話す・近寄って話す・気持ちを考える・仲直りする・理由を説明する・叱り方を考える・良いところを伝える・子どもを信じる・抱きしめる）と，「暴力的しつけ」を表す8項目（蹴る・突き飛ばす・投げる・顔を叩く・物で叩く・手足を叩く・放り出す・抑える），「愛情的しつけ」を表す5項目（さする・なでる・こする・にぎる・さわる），「感情的しつけ」を表す6項目（親失格だと思う・子どもの将来が心配・悪いことをしたと思う・イライラする・感情的になる・怒鳴る），「愛情的しつけ」を表す5項目（さする・なでる・こする・にぎる・さわる）であった。5段階（1：いつもしない，2：たいていしない，3：どちらともいえない，4：たいていする，5：いつもする）で回答を求めた。

子どもの自己制御機能：幼児の自己主張―自己抑制に関する質問紙（大内・長尾・櫻井，2008）の

22 項目を採用した。7 段階（1：まったくあてはまらない～7：まったくその通り当てはまる）評定で回答を求めた。

Internal Working Models（IWM）：母親の自己と他者と関係に関する心的表象を検討するため，戸田（1988）が作成した Internal Working Models（IWM）内的作業モデル尺度の 18 項目を採用した。6 段階（6：非常によくあてはまる～1：全くあてはまらない）評定で回答を求めた。

倫理的配慮：本研究は，神奈川大学人を対象とする研究倫理審査委員会の承認を受けた（受付番号 2016―34）。

結果

抱っこ時間の子どもの年齢差

5 つの育児場面の各抱っこ時間と総抱っこ時間，総非抱っこ時間に関して，時間単位を分単位に変換し，平日と休日の平均と標準偏差を算出した（表 1）。子どもの年齢を 4 群（2 歳児：1～2 歳，3 歳児：3 歳，4 歳：4 歳，5 歳：5～6 歳）に分け，Kruskal-Wallis 検定を行った結果，平日は，泣き場面の抱っこ時間（分）と総非抱っこ時間（分）で年齢の主効果が認められた（泣き $p = .027$，総非抱っこ時間 $p = .013$）。休日は，総非抱っこ時間（分）の主効果が認められた（$p = .023$）。下位検定は Man-Whiteny の U 検定を採用し，Bonferroni の修正により有意水準の値を調整した。平日と休日ともに 3 歳よりも 5 歳において総非抱っこ時間（分）が長かった。

主要な育児場面の抱っこ量の年齢差を検討するため，5 つの育児場面の抱っこ時間を加算し，平日と休日の平均と標準偏差を算出した。4 つの年齢群の平均を図示した（図 1 と図 2）。年齢群の違いを，Kruskal-Wallis 検定により検討した結果，平日も休日も有意な年齢の主効果が認められなかった。

抱っこ時間の育児場面差

5 つの育児場面の抱っこ時間（分）について，全年齢の平均と標準偏差を算出した（表 1）。Friedman 検定により，抱っこ時間（分）の 5 つの育児場面差を検討した結果，平日と休日の両方で育児場面の主効果が認められた（$p = .001$）。多重比較検定は，Bonferroni による有意水準の修正を行い，Wilcoxon signed-rank 検定を実施した。平日は，寝かしつけ場面は他 4 場面（遊び・泣き・食事・入浴）

図 1　主要な育児場面の平日の親子の抱っこ時間

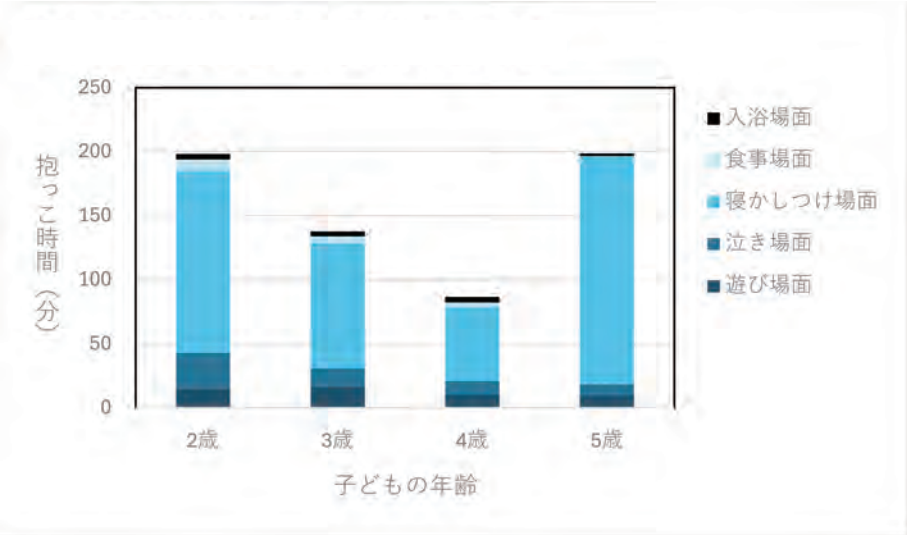
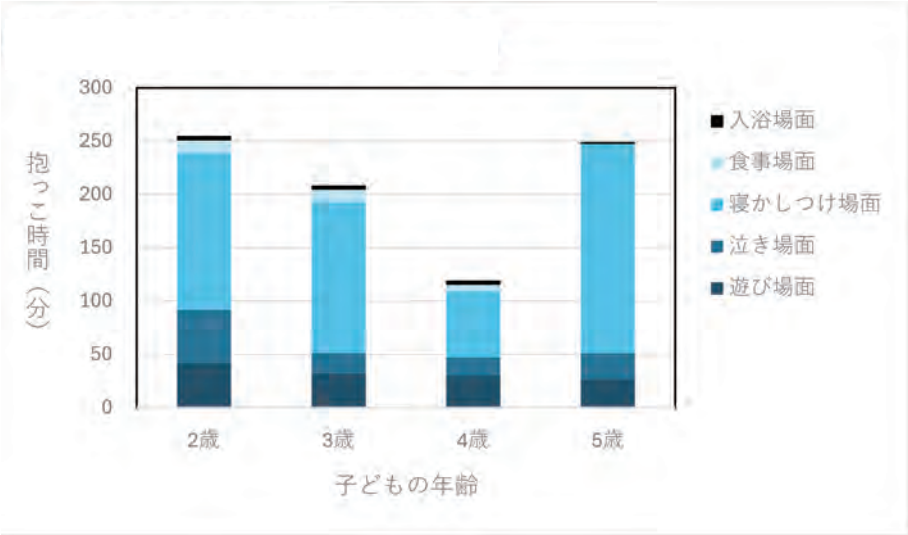


図2　主要な育児場面の休日の親子の抱っこ時間



に比べて，有意に抱っこ時間が長かった（all $p = .001$）。泣き場面と遊びは，食事と入浴場面に比べて抱っこ時間が長かった（all $p = .001$）。休日は，遊び場面と寝かしつけ場面，泣き場面が，食事場面と入浴場面よりも抱っこ時間が多かった（all $p = .001$）。

抱っこ時間の平日と休日の比較

従属変数を，全年齢の5つの育児場面の抱っこ時間と総抱っこ時間，総非抱っこ時間にして，独立変数を平日休日の一要因にした分散分析を行った。遊び場面と泣き場面，寝かしつけ場面の抱っこ時間，総非抱っこ時間（分）で主効果が認められた（遊び $F(1,44) = -3.557$，$p = .001$，泣き $F(1.44) = -2.352$，$p = .016$　寝かしつけ $F(1.44) = -3.557$，$p = .001$，総非抱っこ時間 $F(1.44) = -3.557$，$p = .001$）。いずれも，平日よりも休日の方が，抱っこ時間が長かった。

泣きに対する親のタッチタイプの子どもの年齢差

麻生・岩立（2016）を参考に，3つの因子（なだめのタッチ・愛情的タッチ・侵入的タッチ）に属する各カテゴリーの評定値を加算し下位尺度得点を算出した。子どもの年齢4群ごとに平均と標準偏差を算出した（表2）。泣きに対する親のタッチの年齢差をKruskal-Wallis検定を用いて検討した。なだめのタッチにおいて，年齢の主効果が認められた（$p = .007$）。Man—Whiteny検定を行った結果，2歳児と4歳児は，5歳児よりも，親が子どもの泣きに対してなだめのタッチを用いることが多かった（2歳＞5歳　$p = .007$，4歳＞5歳　$p = .041$）

親のしつけ方略の子どもの年齢差

親のしつけ方略について，麻生（2015）を参考に3つの因子（肯定的しつけ・暴力的しつけ・愛情的しつけ・感情的しつけ）に属する各カテゴリーの評定値を加算し，下位尺度得点を算出した。子どもの年齢ごとに，3つの下位尺度得点の平均と標準偏差を算出した（表3）。Kruskal-Wallis検定により，親のしつけ方略の年齢差を検討した。その結果，子どもの年齢要因の有意な主効果は認められなかった。

表１　育児場面における親子の一日の抱っこ時間

	2 歳児（n＝9）				3 歳児（n＝8）			
	平日		休日		平日		休日	
育児場面	*M*	*SD*	*M*	*SD*	*M*	*SD*	*M*	*SD*
遊び場面の抱っこ（分）	14.7	10.7	41.7	54.7	16.3	13.3	31.8	31.6
泣き場面の抱っこ（分）	28.3	20.0	50.0	55.5	14.4	13.5	19.4	20.1
寝かしつけの抱っこ（分）	141.9	169.1	147.5	165.8	97.5	179.9	141.3	214.9
食事場面の抱っこ（分）	9.1	12.2	11.6	15.2	5.6	8.2	11.9	18.9
入浴場面の抱っこ（分）	4.0	3.5	4.0	3.5	3.8	2.3	3.8	2.3
総抱っこ時間（分）	206.3	176.7	305.0	211.6	190.7	260.2	257.1	262.6
総非抱っこ時間（分）	855.0	323.5	645.0	438.3	604.2	266.3	368.6	298.9
	4 歳児（n＝17）				5 歳児（n＝11）			
	平日		休日		平日		休日	
育児場面	*M*	*SD*	*M*	*SD*	*M*	*SD*	*M*	*SD*
遊び場面の抱っこ（分）	10.2	15.8	30.1	36.6	9.5	17.2	26.3	36.3
泣き場面の抱っこ（分）	10.6	7.6	16.8*	15.2	8.8	10.1	24.5	52.3
寝かしつけの抱っこ（分）	57.8	122.4	62.2	123.1	178.2	242.3	196.4	263.9
食事場面の抱っこ（分）	3.8	6.7	5.9	15.1	0.0	0.0	0.0	0.0
入浴場面の抱っこ（分）	4.2	4.3	3.9	4.4	1.8	4.0	1.8	4.0
総抱っこ時間（分）	97.2	142.1	158.3	165.5	211.6	247.1	271.5	315.4
総非抱っこ時間（分）	1058.6	381.1	892.3	476.0	1179.5	264.3	1063.0	389.1
	全年齢（n＝45）							
	平日		休日					
育児場面	*M*	*SD*	*M*	*SD*				
遊び場面の抱っこ（分）	12.0	14.7	31.8**	39.0				
泣き場面の抱っこ（分）	14.4	14.1	25.8**	38.6				
寝かしつけの抱っこ（分）	110.4	177.9	125.6**	191.9				
食事場面の抱っこ（分）	4.2	7.8	6.5	14.2				
入浴場面の抱っこ（分）	3.5	3.8	3.4	3.8				
一日の合計抱っこ時間（分）	968.6	372.7	793.9	473.1				
総非抱っこ時間（分）	162.3	199.4	233.2**	234.8				

＊は，平日と休日の比較において，有意差が見られた項目の数値の大きい方ににつけた。

表２　子どもの泣きに対する親のタッチタイプの年齢比較

	2 歳児（n＝9）		3 歳児（n＝8）		4 歳児（n＝17）		5 歳児（n＝11）			
因子	*M*	*SD*	*M*	*SD*	*M*	*SD*	*M*	*SD*	*p*	Man―Whiteny
なだめタッチ	18.6	2.8	17.0	2.9	17.3	3.1	14.4	1.7	**	2 歳＞5 歳**4＞5 歳*
愛情的タッチ	12.2	2.5	12.9	2.4	12.3	2.2	10.8	1.9		
侵入的タッチ	6.7	2.1	6.6	1.4	6.4	1.8	6.0	0.7		

注．*p＜.05　**p＜.01

表3　親のしつけ方略における年齢比較

	2歳児（n＝9）		3歳児（n＝8）		4歳児（n＝17）		5歳児（n＝11）		
因子	*M*	*SD*	*M*	*SD*	*M*	*SD*	*M*	*SD*	*p*
肯定的しつけ	36.6	5.5	40.6	5.3	37.1	3.7	36.0	5.8	n.s
暴力的しつけ	12.3	3.7	9.5	1.9	11.3	2.6	12.9	4.5	n.s
愛情的しつけ	12.7	4.5	12.0	3.6	12.2	4.4	10.8	3.6	n.s
感情的しつけ	20.2	5.7	16.4	4.3	18.1	4.6	19.9	3.7	n.s

子どもの自己制御と Internal Working Models（IWM）の下位尺度得点の算出

子どもの自己制御機能は，先行研究（大内ら，2008）を参考に，4つの因子（自己主張・自己抑制・注意の移行・注意の焦点化）を採用した。自己主張は，子どもが自分の意見や欲求を他者に伝えることができる能力である。自己抑制は，社会的場面において，自分の欲求や行動を抑制・静止できる能力である。注意の移行は，必要に応じて現在注意をむけている対象から別の対象へと適切に注意を切り替える能力である。注意の焦点は，取り組んでいる最中のことに注意を向け続ける能力とされている。各因子に属する項目の評定値を加算し，下位尺度得点を算出した。子どもの年齢ごとに，各下位尺度得点の平均と標準偏差を算出した（表4）。

Internal Working Models（IWM）は，戸田（1988）より，3つの因子（安定型・アンビバレント型・回避型）を採用した。安定型は，他者は応答的で自己は援助される価値がある存在という表象を有し，アンビバレント型は他者に対して，信頼と不信のアンビバレントな表象を有する。回避型は，他者は拒否的で援助が期待できないため，他者を頼らずに自己充足する表象を有する。本研究は，アタッチメントパターンを類型としてではなく，個人内の特性としてとらえた（戸田，1990）。各因子に属する項目の評定値を加算し，下位尺度得点を算出した。

表4　自己制御の年齢差

	2歳児（n＝9）		3歳児（n＝8）		4歳児（n＝18）		5歳児（n＝12）			
	M	*SD*	*M*	*SD*	*M*	*SD*	*M*	*SD*	*p*	Bonfferoni
自己主張	29.0	8.7	38.9	5.6	33.5	7.6	34.3	5.6	n.s	
自己抑制	19.3	3.4	18.5	3.2	20.3	4.4	21.7	3.8	n.s	
注意の移行	18.3	1.2	19.1	1.7	19.4	2.2	20.8	1.9	＊	5歳＞2歳
注意の焦点化	15.8	2.2	15.9	3.1	15.6	3.3	14.2	3.0	n.s	

注．$^{*}p<.05$

子どもの自己制御機能の年齢差

子どもの自己制御機能の4つの因子に関して，Kruskal-Wallis 検定により，自己制御機能の年齢差を検討した。年齢要因の有意な主効果は認められなかった（表4）。

抱っこ時間と子どもの自己制御機能，Internal Working Models（IWM）との関連

抱っこ質問紙の7項目と子どもの自己制御機能の3因子，Internal Working Models（IWM）の3因子との関連性をそれぞれ検討した。ピアソンの相関係数を求めた結果，平日の総非抱っこ時間と注意の移行との間に有意な正の相関があった（$r=.379$，$p=.05$）。また，休日の遊び場面の抱っこ時間と自己抑制と，総非抱っこ時間と注意の移行との間に有意な正の相関があった（$r=.329$，$p=.05$）。

平日の総抱っこ時間と親のアンビバレント得点との間に，有意な負の相関が認められた（$r=-.358$，$p=.05$）。休日の各場面の抱っこ時間と Internal Working Models（IWM）の間に関連性は見られなかった。

泣きに対する親のタッチと自己制御機能，Internal Working Models（IWM）との関連

子どもの泣きに対する親の3つのタッチタイプと子どもの自己制御機能，親のInternal Working Models（IWM）との関連性を検討した。ピアソンの相関係数を求めた結果，なだめのタッチと自己抑制との間に有意な負の相関が認められた（$r=-.372$，$p=.01$）。愛情的タッチと自己主張との間に有意な正の相関があり，自己抑制との間に有意な負の相関が認められた（自己主張 $r=.307$，$p=.01$，自己抑制 $r=-.305$，$p=.01$）。泣き場面の親のタッチとInternal Working Models（IWM）との関連は認められなかった。

親のしつけ方略と自己制御機能，Internal Working Models（IWM）との関連

親のしつけ方略の3因子と子どもの自己制御機能，親のInternal Working Models（IWM）との関連性を検討した。ピアソンの相関係数を求めた結果，暴力的しつけ及び感情的しつけと自己抑制との間に，有意な正の相関が認められた（暴力的 $r=.373$，$p=.01$，感情的 $r=.334$，$p=.05$）。

親のInternal Working Models（IWM）の安定型は肯定的しつけと正の相関があり，暴力的しつけ及び感情的しつけと負の相関があった（肯定的 $r=.293$　$p=.05$，暴力的 $r=-.423$，$p=.01$，感情的 $r=-.317$，$p=.05$）。アンビバレント型は，感情的しつけと正の相関があった（$r=.426$，$p=.01$）

考察

保育園児の抱っこ時間の年齢差

本研究では，保育園児を対象として乳幼児期の親子の身体接触の発達的変化を検討することを目的とした。まず，抱っこ時間の年齢差を述べる。有意な年齢差が認められたのは，母親が自己申告した一日のうち子どもを抱いていない時間の合計であった。平日と休日ともに5歳児の方が3歳よりも，母親が子どもを抱いていない時間が長かった。この結果は，子どもの成長とともに，親と子の身体が分離して過ごす時間が増える可能性を示唆する。マーラー（2000）は，乳児の生物学的誕生と個体の心理的誕生は一致していないと考え，後者を分離―個体化過程と名付けた。分離―個体化過程は，正常な自閉期に始まり，正常な共生期，分離―個体化期へと段階的に進む。生後4，5か月から生後30，36か月以降，子どもは対象喪失という最小限の脅威に直面し，母親の存在あるいは母親の情緒的有効性によって，次第に母親との共生的融合から脱出し，子どもの個性化を確立させるとした。本研究の年少児よりも年長児の方が，母親に抱っこされていない時間が多いという結果は，マーラーの分離―個体化理論（2000）で説明されているプロセスと一致している。従って，保育園児であっても，親と子どもの分離―個体化過程は，年齢に応じて漸次的に進行する可能性があると考えられる。

一方，子どもが親から抱っこされる時間に関しては，いずれの場面においても有意な年齢差は認められなかった。5つの育児場面の抱っこ時間（分）をグラフすると，子どもの年齢が大きくなるにつれて，減少するわけではなかった（図1と図2）。今回は，サンプルサイズが少なく，統計的に意味のある結果ではないが，平日と休日ともに，5つの育児場面の抱っこ時間の合計は，2歳から4歳にかけて減少し，5歳で増加していた。各場面の抱っこ時間をみると，遊びと泣き，食事場面の抱っこ時間は，2歳から5歳にかけて減少していた。一方で，寝かしつけ場面の抱っこ時間は，4歳から5歳で増加していた。従って，5歳児における寝かしつけ場面の抱っこ時間の長さにより，抱っこ時間の年齢差が検出されなかった可能性がある。

何故，5歳は寝かしつけ場面の抱っこ時間が増加したのだろうか。理由としては，幼児期の不安が考えられる。幼児の全般性不安は，低年齢児よりも高年齢児で高いといわれている（西澤・濱口，2010）。本研究の調査は2月に実施されたため，得られたデータの中には，卒園や就学準備に対して，不安やストレスを感じる年長児が含まれていた可能性がある。保育園は集団保育の形態をとっており，

もし子どもがある種の不安を感じていたとしても，保育士が日中に特定の子どもを抱っこし続けることは難しい。このような子どもの解消されなかった不安や満たされなかった欲求が，就寝時に母親に抱っこを求める行動につながっていた可能性がある。が，母親の子どもに対する身体接触は，母親に向けられた子どもの欲求や情動に随伴して応答的に提供されていると考えられる。保育園児が家庭において母親に抱っこされる時間は，子どもの年齢により画一的な傾向があるのではなく，子どものニーズや親子関係の性質により規定されると思われる。

保育園児の母親からうける抱っこ時間の場面差

本研究の最も興味深い結果は，寝かしつけ場面の抱っこ時間である。寝かしつけ時の抱っこ時間は，他の育児場面に比べて非常に長かった。平日に子どもが寝かしつけをされる際に，母親に抱っこやおんぶ，添い寝をされた時間は，2 歳児は約 142 分，3 歳児は約 97 分，4 歳児は約 58 分，5 歳児は約 178 分であった。休日も同様の高い値を示した。日本の親子の就寝形態は，他文化圏に比べ，ベッドシェア率が高く，寝かしつけにかかる所要時間が長いといわれる（Mindell et al, 2010）。本研究のデータは家庭児が含まれておらず，一般化することができない。しかしながら，母親が就寝時に子どもに対し感受性豊かに細やかに応答することは，子どものストレスの緩和（Morgan et al., 2000）や安定したアタッチメント形成（Higley & Dozier, 2009）に貢献するとされる。保育園児の場合，保育園で過ごす間は母親と完全に接触することはできない。このような環境上の不利によりもたらされた子どもの身体接触経験の不十分さは，就寝時に母親から恒常的に安定した身体接触を受けることにより補完されている可能性もある。今後は，本研究で得られた保育園児に対する母親の身体接触行動の特徴について，家庭児データとの比較検討を行い，就寝時の親子間の身体接触の意義を明らかにする必要がある。

身体接触と自己制御機能との関連

本研究は，乳児が受ける身体接触と子どもの自己制御機能との関連を検討した。まず，抱っこ時間と自己制御機能の関連であるが，休日の遊びの際の抱っこ時間が長いほど，子どもの自己抑制得点が高かった。平日と休日の抱っこ時間が少ないほど，子どもの注意の移行得点が高かった。先行研究において，抱っこが乳児の泣きを抑制することや（Hunziker & Barr, 1986），母親との注意を共有する時間が長いこと（Feldman et al., 2002）は報告されている。本研究の結果は，先行研究と一致しており，抱っこが，子どもの情動や認知を調節する効果がある可能性を示唆した。

子どもの泣きに対するタッチと自己制御機能の関連では，親のなだめのタッチが多いと，子どもの自己抑制得点は低くなった。愛情的タッチが多いと，子どもの自己主張得点は高く，自己抑制得点が低くなった。抱っこ時間は子どもの自己抑制を高めるのに対して，子どもの泣きに対する親のタッチは子どもの自己抑制を弱め，自己主張を促進するという異なる傾向が認められた。

この一因として考えられるのは，抱っことタッチタイプの身体接触パターンの違いである。抱っこは，子どもの身体と親の身体が重なり合い，静的に連続的に接触する行為である。子どもは，自らの身体全体が一貫して親の身体に包み込まれ，安心感を感じることができる。一方，タッチタイプは，親と子の身体の部分が一時的に触れる行為である。タッチタイプの様々なバリエーションは，異なる刺激を乳児の身体に与える。その結果，子どもは，様々な情動的メッセージを受け取る。本研究より，親の抱っことタッチタイプは，子どもの情動制御のプロセスに異なる作用を与える可能性が示唆された。

親のしつけ方略と子どもの自己制御機能の関連では，親が暴力的しつけや感情的なしつけを行うと子どもの自己抑制得点が高かった。子どもの自己制御機能は，親との相互作用により調節され，次第に情動の自己調節が可能な段階へ発達する（Tronick, 2018）。親から侵入的で否定的な子育てを受けた乳幼児は，否定的感情を表す傾向がある（Diaz et al., 2019）。乳幼児期の感情的な気質は，5 歳半の時点での感情的・行動的困難のレベルと関連がある（Abulizi et al., 2017）。このような先行研究をふまえると，本研究の暴力的しつけと感情的しつけは，子どもの情動の自己調節に対して望ましいしつけ方略ではな

いと考えられる。親が暴力的しつけや感情的しつけを行うことにより，子どもは一時的な不安や恐怖心を感じ，自己抑制得点が高くなったと考えられる。

身体接触と Internal Working Models（IWM）との関連

親のアンビバレント型得点の少なさと，平日の抱っこ時間の長さに関連が見られた。また，親の安定型得点が高いほど肯定的しつけが多く，暴力的しつけ及び感情的しつけが少なかった。アンビバレント型得点が高いと，感情的しつけが多かった。古典的研究（Egland et al., 1984）においては，子どものニーズに敏感で互恵的なかかわりをする母親の乳児は，安定型である可能性が高かった。一方，子育てに自信がなく，緊張やイライラが多く，授乳を機械的に行い，相互作用の機会を減らすなどした母親の乳児は，回避型に分類されていた。本研究は，内的作業モデルの構成因子を類型ではなく，特性として使用した。よって，先行研究との厳密な比較は難しい。しかしながら，肯定的しつけが安定的アタッチメントと関連し，暴力的及び感情的しつけが不安定なアタッチメントと関連する結果は，先行研究と矛盾していない。内的作業モデルと母子の身体接触及びしつけ方略との関連を検討した研究は極めて少なく，本研究で得られた知見は有益である。

本研究の限界と今後の課題

本研究は，保育園児をもつ母親を対象に，母子間の身体接触に注目して，年齢差とその関連要因について検討してきた。これまで，保育園児が，家庭においてどの程度親から身体接触を受けているのかに関する研究知見は少なく，本研究により有益な示唆を提供することができた。しかしながら，本研究では，サンプルサイズが少なかったため，統計的に意味のある差が検出しにくかった。今後は，データ数を増やし，本研究の結果を実証的に検討していくことが課題である。

引用文献

Abulizi, X., Pryor, L., Michel, G., Melchior, M., van Der Waerden, J., & EDEN Mother–Child Cohort Study Group.（2017）. Temperament in infancy and behavioral and emotional problems at age 5.5: The EDEN mother-child cohort. PLoS one, 12（2）, e0171971.

麻生典子（2015）．子どもの叱り方尺度の作成――日本発達心理学会第 26 回大会発表論文集.

麻生典子・岩立志津夫（2016）．乳児に対する母親のタッチの関連要因――初産婦と経産婦の比較――小児保健研究，75（2），pp. 187–195.

麻生典子・岩立志津夫（2018）．母親の精神的健康が乳児に対する身体接触に及ぼす影響――身体接触量と身体部位に焦点をあてて――日本発達心理学会第 29 回大会発表論文集.

Baildam, E. M., Hillier, V. F., Menon, S., Bannister, R. P., Bamford, F. N., Moore, W. M. O., & Ward, B. S.（2000）. Attention to infants in the first year. Child: Care, Health and Development, 26（3）, 199–216.

Belsky, J., & Rovine, M. J.（1988）. Nonmaternal care in the first year of life and the security of infant-parent attachment. Child Development, 157–167.

Berecz, B., Cyrille, M., Casselbrant, U., Oleksak, S., & Norholt, H.（2020）. Carrying human infants–An evolutionary heritage. Infant Behavior and Development, 60, 101460.

Bowlby, J. 1969 Attachment and loss: Vol. 1. Attachment. New York: Basic Books.（黒田実郎他訳　母子関係の理論 Ⅰ　愛着行動　岩崎学術出版社 1982）

Caudill, W., & Weinstein, H.（1969）. Maternal care and infant behavior in Japan and America. Psychiatry, 32（1）, 12–43.

Diaz, A., Swingler, M. S., Tan, L., Smith, C. L., Calkins, S. D., & Bell, M. A.（2019）. Infant frontal EEG asymmetry moderates the association between maternal behavior and toddler negative affectivity. Infant Behavior and Development, 55, 88–99.

Egeland, B., & Farber, E. A.（1984）. Infant-mother attachment: Factors related to its development and changes over time. Child Development, 753–771.

Feldman, R., Weller, A., Sirota, L., & Eidelman, A. I.（2002）. Skin-to-Skin contact（Kangaroo care）promotes self-reg-

ulation in premature infants: sleep-wake cyclicity, arousal modulation, and sustained exploration. Developmental psychology, 38 (2), 194.
Goossens, F. A., & Van IJzendoorn, M. H. (1990). Quality of infants' attachments to professional caregivers: Relation to infant-parent attachment and day-care characteristics. Child Development, 61 (3), 832–837.
繁多進，宮沢文子，＆小林かおり．(1982, October)．230 アタッチメントの発達に関する実験的研究：保育園児と家庭児の比較から（家族関係と子どもの発達 , 発達）．In 日本教育心理学会総会発表論文集 第 24 回総会発表論文集 (pp. 78–79)．一般社団法人 日本教育心理学会.
Higley, E., & Dozier, M. (2009). Nighttime maternal responsiveness and infant attachment at one year. Attachment & Human Development, 11 (4), 347–363.
Hunziker, U. A., & Barr, R. G. (1986). Increased carrying reduces infant crying: a randomized controlled trial. Pediatrics, 77 (5), 641–648.
Ishijima, K., & Negayama, K. (2017). Development of mother–infant interaction in tickling play: The relationship between infants' ticklishness and social behaviors. Infant Behavior and Development, 49, 161–167.
数井みゆき，遠藤利彦，田中亜希子，坂上裕子，＆菅沼真樹．(2000)．日本人母子における愛着の世代間伝達．教育心理学研究，48 (3)，323–332.
こども家庭庁（2024）．保育所等関連状況取りまとめ（令和 6 年 4 月 1）．https://www.cfa.go.jp/assets/contents/node/basic_page/field_ref_resources/4ddf7d00-3f9a-4435-93a4-8e6c204db16c/82ad22fe/20240829_policies_hoiku_torimatome_r6_02.pdf　閲覧日　2024 年 11 月 1 日
厚生労働省（2023）．2023 年（令和 5）年 国民生活基礎調査の概況 https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa23/dl/10.pdf　閲覧日　2024 年 11 月 1 日
近藤清美（2007）．保育所児の保育士に対するアタッチメントの特徴：母子関係と比較して．北海道医療大学心理科学部研究紀要，3，13–23.
近藤清美（2008）．0 歳児保育における保育士と母親に対するアタッチメントの連続性．北海道医療大学心理科学部研究紀要，(4)，1–10.
Leerkes, E. M., Parade, S. H., & Gudmundson, J. A. (2011). Mothers' emotional reactions to crying pose risk for subsequent attachment insecurity. Journal of Family Psychology, 25 (5), 635.
Luijk, M. P., Mileva-Seitz, V. R., Jansen, P. W., van IJzendoorn, M. H., Jaddoe, V. W., Raat, H., ... & Tiemeier, H. (2013). Ethnic differences in prevalence and determinants of mother–child bed-sharing in early childhood. Sleep Medicine, 14 (11), 1092–1099.
Mahler, M, S (1975). The Psychological Birth of the Human Infant Basic Books Inc: New York（マーラー. S. M. 高橋雅士・織田正美・浜畑紀訳（2000）. 乳幼児の心理的誕生――母子の共生と個体化　黎明書房）
Mindell, J. A., Sadeh, A., Wiegand, B., How, T. H., & Goh, D. Y. (2010). Cross-cultural differences in infant and toddler sleep. Sleep Medicine, 11 (3), 274–280.
Morgan, B. E., Horn, A. R., & Bergman, N. J. (2011). Should neonates sleep alone? Biological Psychiatry, 70, 817–825. https://doi.org/10.1016/j.biopsych.2011.06.018.
中川陽子，＆藤生英行．(2015)．日本語版幼児用不安尺度の開発．小児保健研究＝The Journal of child health, 74 (2), 247–253.
NICHD Early Child Care Research Network. (2002). Early child care and children's development prior to school entry: Results from the NICHD Study of Early Child Care. American Educational Research Journal, 39 (1), 133–164.
西澤千枝美，＆濱口佳和．(2010)．幼児用不安傾向評定尺度の作成――不安傾向と社会的スキルならびに問題行動との関連の検討――．カウンセリング研究，43 (2)，150–160.
大内晶子，長尾仁美，＆櫻井茂男．(2008)．幼児の自己制御機能尺度の検討　社会的スキル・問題行動との関係を中心に．教育心理学研究，56 (3)，414–425.
Swingler, M. M., Perry, N. B., Calkins, S. D., & Bell, M. A. (2014). Maternal sensitivity and infant response to frustration: The moderating role of EEG asymmetry. Infant Behavior and Development, 37 (4), 523–535.
戸田弘二（1990）．女子青年における親の養育態度の認知と Internal Working Models との関連．北海道教育大学紀要．第一部．C，教育科学編，41 (1)，91–100.
戸田弘二（1988）．青年期後期における基本的対人態度と愛着スタイルー作業仮説（working models）からの検

討一日本心理学会第 52 回大会発表論文集.
Tronick, E. Z.（2018）. Emotions and emotional communication in infants. Parent-Infant Psychodynamics, 35–53.
Winnicott, D. W.（1962）. The theory of the parent-infant relationship：further remarks. The International Journal of Psycho-Analysis, 43, 238.

Developmental changes in physical contact between mothers and children in the home and the related factors: Focusing on preschool children

Noriko Aso

Abstract

This study examined the age differences in physical contact with children in the home and the factors associated with this, targeting 45 mothers with preschool children between the ages of 1 and 6. Using a questionnaire method, mothers were asked to respond to questions about their physical contact with their children (duration of holding, soothing methods while cying, discipline strategy) in five childcare situations (playtime, crying, bedtime, eating, bathing).

The analysis showed that there is no main effect of age of the child on the holding time on both weekdays and weekends. Holding time in the 'bedtime' situation was the longest out of all five childcare situations. Mothers spent more time holding their children on holidays than on weekdays. The longer the time spent holding the child in the 'playtime' situation on weekends and holidays, the higher the child's self-control score. It also showed a correlation between shorter holding time during playtime on weekends and holidays and a higher attention shift score.

The more soothing and affectionate touches the mother gave in response to the child's crying, the lower the child's score for self-control.

The more affectionate touches the mother gave in response to the child's crying, the higher the child's score for self-assertion.

This study suggests that the amount of time the mother spends holding the child and the mother's touch in response to the child's crying may be related to the development of the child's self-regulation.

Keywords: preschool children, mothers, holding, soothing methods, developmental changes